

第 部門

地区工業に祠が果たす役割について～堺市を対象として～

大阪工業大学 学生員 ○鴨井 裕貴
 大阪工業大学 学生員 網島 裕貴
 大阪工業大学 学生員 長谷川 祐平
 大阪工業大学 正会員 岩崎 義一

1. 研究目的と背景

戦国時代に自衛のために町の周囲を濠で囲み、その中で豪商を代表とした自治を行っていた町を環濠自治都市と呼び、堺はその代表的な一例である。環濠内には寺社等が縁辺部に多く建造され、環濠の出入り口には地蔵堂が設置されていた。そのためか環濠都市消失後数百年経った現在でも周囲の地区及び事業所内等に小規模な社が祀られているのを見かけることがある。この社は祠（ほこら）と呼称されて、これらは工場では特に神棚という形態で存在することが多い。しかし企業の生産工場や事業所内という生産合理性の追求など特殊な環境条件において、祠が生産の向上に直接的に関わっているとは考えにくい。間接的には加工技術や品質の維持など生産活動を通じて関わっているものと想定される。

そこで、本研究では生産工場において祠が果たしている役割を明らかにしてみたい。

2. 研究内容与方法

対象とする工場へのアンケート調査をおこなった。このアンケートでは工場の属性・職員の祠への関わり方・祠から受ける影響などについて尋ねた。工場の集積・業種・保有技術を工業の属性・職員の属性等から分析を行った。

3. 調査対象地区選定理由と現状・特徴

本研究では堺市堺区の環濠都市周辺の工場集積地を対象地域として調査を進めた。選定理由として

- 高度経済成長を支えた大中小工場の集積地である
- 環濠自治都市として発展し、その後工業地として発達したため工場と祠に何らかの関係性が有ることが期待できる

の2点が挙げられる。対象地区を構成する工業地域と準工業地域において調査を行い、さらにそれらを3つの集積地区に分けた。各集積別に立地している工場の地図を図 - 1、現状・特徴を表 - 1 に記す。

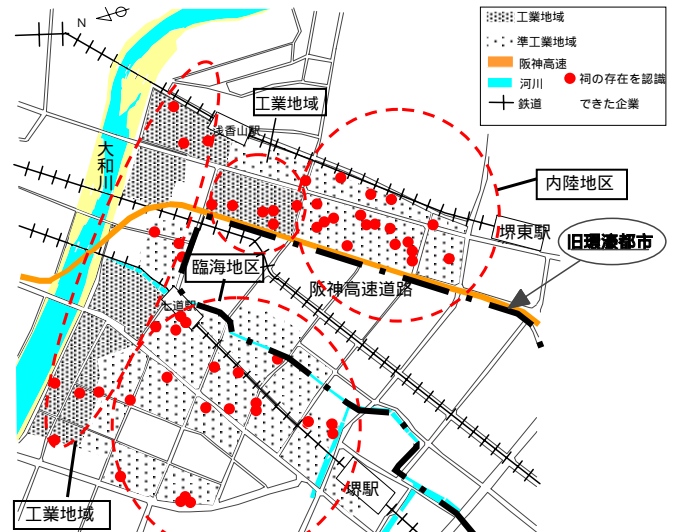


図 - 1 調査対象地域

表 - 1 各集積の現状・特徴比較

	現状	特徴
工業地域	創設：昭和41年以降の割合が高い 規模：35人以上の割合が高い 業種：一般機械器具業の割合が高く、鉄鋼業の割合が低い 技術：金属プレス、金型設計製造技術の割合が高い 拝む頻度：週1回～月1回の割合が高い 祠の設置場所：事業所内の割合が高く、作業所内の割合が低い 拝む内容：作業所の安全の割合が大半で、技術力の向上や円滑な人間関係については採られていない	従業員数の多い工場が多いのは、他の集積と違い土地全てを工業専用として使用できるためであると考えられる。祠に拝む頻度が低いため、大半の工場が事業所内に設置しているが、特に従業員の多い場合は屋外に設置することもある。週1回は祠に拝んでいる従業員もいるため、一概に祠との関係が希薄であるとは言えないが、作業所の安全などの工場の全体的なことが中心であることから、個々人の意識にどのような影響を与えているかについては、多くは期待できないと思われる。
臨海地区	創設：大正以前～昭和20年の割合が高い 規模：10～34人の割合が高い 業種：鉄鋼業の割合が高く、非金属業の割合が低い 技術：金属プレス加工技術の割合が高い 拝む頻度：工業と似ている 祠の設置場所：工業と似ている 拝む内容：病氣平癒、円滑な人間関係の割合が高く、技術力の向上については採られていない	土地的に歴史の浅い臨海地区に創業年の比較的古い工場が多いのは、内陸地区側の古くからある工場が移転してきたためと考えられる。また従業員が比較的多いのは、工場の歴史が古いためと考えられる。祠に拝む内容は、工業地域に円滑な人間関係を加えた形になっている。これは工業地域より従業員数が少なく、綿密なコミュニケーションをとる必要があるためであると考えられる。
内陸地区	創設：昭和21～40年の割合が高い 規模：10人未満の割合が高い 業種：臨海と似ているが、臨海に比べ鉄鋼業の割合が高い 技術：臨海と似ている 拝む頻度：毎日の割合が高い 祠の設置場所：作業所内の割合が高い 拝む内容：臨海と似ているが、技術力の向上についても採られている	土地に比べ創業がそれほど古くないのは、大きな工場を退職・引退した従業員が新しく自分の工場を創設したからと考えられる。実際に6.6才以上の従業員の割合も高かった。毎日拝むためか、作業所内に祠を多く確認できる。また上記2つの集積地に加え、技術力の向上について拝んでいるのは職人肌の従業員が多いのではないかと推測できる1つの要因である。

4. アンケート回答の特徴

図 - 2 は祠に拝む頻度を従業員数・拝むことに関係する行動の関係性について、拝むと答えた回答者のみで集計し示した図である。図

- 2 から従業員数が比較的小さく、毎日祠に拝む人の割合が高い工場では、個々人の技術力向上や製品品質向上に関係する行動などが

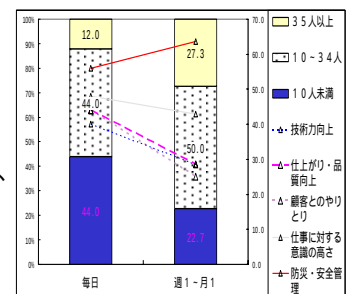


図 - 2 拝む頻度・従業員数・拝むことに関係する行動の関係性

祠を拝むことに影響を受けると感じており、自分がどう在りたいかを重視していると考えられる。一方従業員数が多く、週1～月1回祠に拝む人の割合が高い工場では、安全管理・仕事に対する意識の高揚に関係する行動などが祠を拝むことに影響を受けると感じており、工場全体の風紀・秩序といったものを重視していると考えられる。

5. アンケート項目の分析と予測

従業員が祠の存在や祠の影響による自らの行動について、集積地別・保有技術別の各項目についてどのような関係性があるかを数量化2類を用いて評価した。

a) 集積地：レンジから1軸は各個人の防災・安全管理や仕事に対する意識が高く『作業所環境の秩序の重要性』を表す軸と考えられる。この軸によって地区が明瞭に分類されており、事業所規模（従業員ベース）によって作業所秩序の重要性も示唆しているといえる。

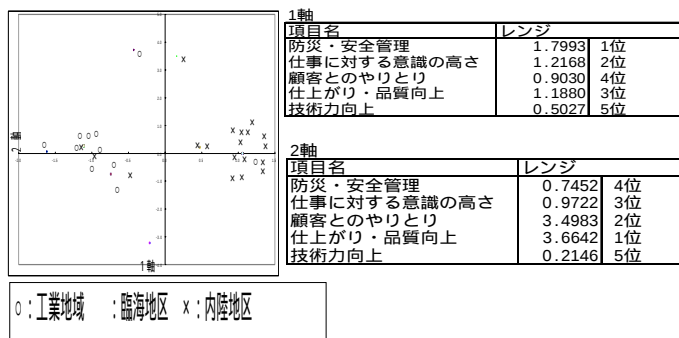


図 - 3 サンプルスコア分布図とレンジ表

b) 保有技術：レンジから1軸は仕上がり・品質の向上や技術力の向上が高く『技術や技能の重要性』を表す軸と考えられる。2軸は仕事に対する意識の高さや防災・安全管理などが高く『作業所環境の秩序の重要性』を表す軸であると考えられる。これらの軸によって技術の秩序が群（第1象限は金属加工・プレス・板金などで比較的技術・技術を重視する産業で、第3象限は金型設計・表面処理などソフトを内包し自由でセンスを比較的重視する産業）として分離している。この群分類は軸の意味からも整合性があると考えられる。

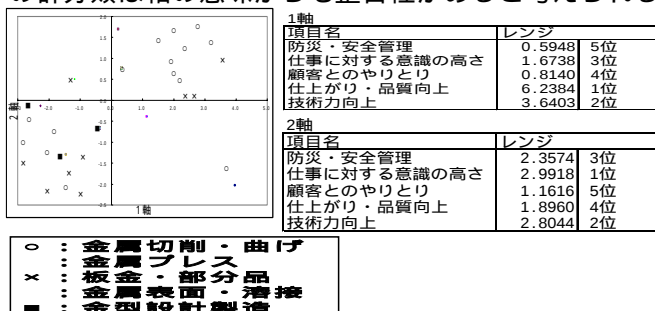


図 - 4 サンプルスコア分布図とレンジ表

6. まとめと考察

本研究では、アンケート調査に基づく実態分析から、祠が地区工場にどのような役割を持って存在しているかを明らかにした。

1) 集積地区：工業地域、臨海地区では作業環境の秩序に対する意識、内陸地区では技能・技術、勤労そのものに対する意識を高揚させる。

2) 技術：技能・技術を重視するものにおいては技能・技術、勤労そのものに対する意識、技術よりもソフト面を重視するものにおいては作業環境の秩序に対する意識を高揚させる。

3) まとめ：1) 2) から地区工業の祠は“従業員の勤労意識を改善させ、自らの行動理念に反映させるための媒体”としての役割を持っていることが分かった。

神人共働という言葉もあるように、日本人はものづくりという行為に対する独自の価値観・精神論を持っている。また、堺は中世の環濠都市からの工業化であったためより一層そのような傾向が強いと考えられる。今回得られた結果も含め祠を設置する工場が多く集積することで、その工場集積全体へとその効果は波及し、やがては日本のものづくり精神と共にこれからの工業国日本を支えていくものと推測される。

注釈…稲作は神と人間が共同して働き、豊作を見るという神道的意識。共同体社会の生活の安定と発展をもたらすとされる。

[参考文献]

- (1) 河出書房新社：日本人なら知っておきたい神道（新書）
武光 誠（著）
- (2) 日本文芸社：日本神道がわかる本～日本人の思考と美意識・倫理の原点を探る～
本田 総一郎（著）
- (3) 弘文堂：神道辞典
國學院大學日本文化研究所